

「象は鼻が長い」「私はウナギだ」「こんにゃくは太らない」昔から文法上*の扱いで議論がされてきた3つの文である。不思議と日本人には意味が通じるのはなぜだろう。例えば、ウナギ文を聞いて、思い浮かぶシーンは

場所：食事処

場面：注文のオーダー

語り手：客の一人

受け手：ウェイター

時：昼時または夜時（食事処の営業時間）

その他：一緒に来た連れありの可能性

る限界まで省略される。そして、文のスポットが埋まれば、文法間の違いを超えて、翻訳ないし映像化も容易となる。

ではスポットは、AIの推測や知識補完で埋まるのだろうか？例えば、レストラン予約や宅急便の時間指定チャットボットは、会話内容をAIが解析し、スポットを埋める機能がある。さらに、埋まるまでボットは質問を繰り返していく。このように状況が限定され、目的のはっきりしたシーンでは機能しやすい。

ところが、映像も浮かび、意味もつかめるのに、説明

数 | 理 | の | 窓

「私はウナギだ」を映像にする



脳は確率の高そうな状況を想定し、はっきりと分らない詳細部分は一旦保留する。そして情報が追加されると、これら状況の“スポット”をアップデートする。

「蕎麦よりウナギが好きでしたよね。私は給料日前なので、」が追加されると、脳は、私=上司、連れ=部下、部下の注文=蕎麦、時=おそらく昼時、と判断するだろう。しかし、ウナギ文が“ファイティングニモ”の海中の1セリフとなると、ニモの友のウナギ登場シーンが思い浮かんでくる。そんなキャラいた？という疑問は残る。

ウナギ文は情報が極端にすくない割に、伝わるのは、似た体験・コンテクストの共有により、多くのスポットが埋まっているからだ。文化同質性を背景に、文は伝わ

できないものもある。

『行き暮れて 木の下陰を 宿とせば 花や今宵の主ならまし』（現代訳）日が暮れて、木の下を今宵の宿とするならば、桜が主人として、もてなしてくれるだろうか

平家物語の「旅宿の花」 薩摩の守 忠度の辞世の句であり、経緯は物語内でも語られる。反実仮想が解釈を難しくしている面もあるが、他言語への翻訳はもちろん、現代訳でさえもこれでよいのかと思える。追加も省略も許さず、句それ自身でしか伝えられないことに、美しさと思議さが宿っている。 （外園 康智）

* 文法的説明の1つに、日本語は動詞がメインで、主題はあっても主語はないという説がある。